

株式会社大気社

日本証券新聞社 個人投資家向けIRセミナー

2025年3月20日

東証プライム(証券コード:1979)



当社ウェブサイト



当社決算説明会
書き起こし

目次

INDEX

1. 当社事業の紹介	P.03
2. 当社の特長	P.09
3. 成長戦略・環境貢献	P.14
4. 業績	P.17
5. 株主還元	P.20
6. 参考資料	P.25

株式会社 大気社

代表者

長田 雅士

(代表取締役社長執行役員)



創業

1913年

(創業112年)



事業内容

以下の諸設備・装置の設計・施工



ビル空調



産業空調



塗装システム

※ セグメント区分:ビル空調および産業空調は環境システム事業に区分

連結年間売上高

2,935億円

(2024年3月期実績)



従業員数

個別1,729名／連結5,174名

(2024年9月末現在)



連結子会社

32社

(国内4社／海外28社)

(2024年9月末現在)



株式

東証プライム市場

(コード:1979、業種:建設)



自己資本比率

54.0%

(2024年3月期実績)



■ 建物に命を吹き込む**空調設備**

ゼネコン

建物の「皮膚」や「骨格」に相当する、外壁・躯体・内装を建築

サブコン

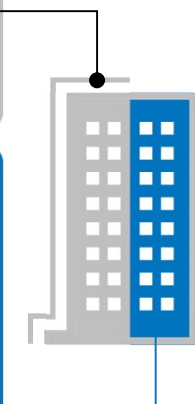
建物の「内臓」や「血管」に相当する、下記のような設備を手掛ける

空調設備

衛生設備

電気設備

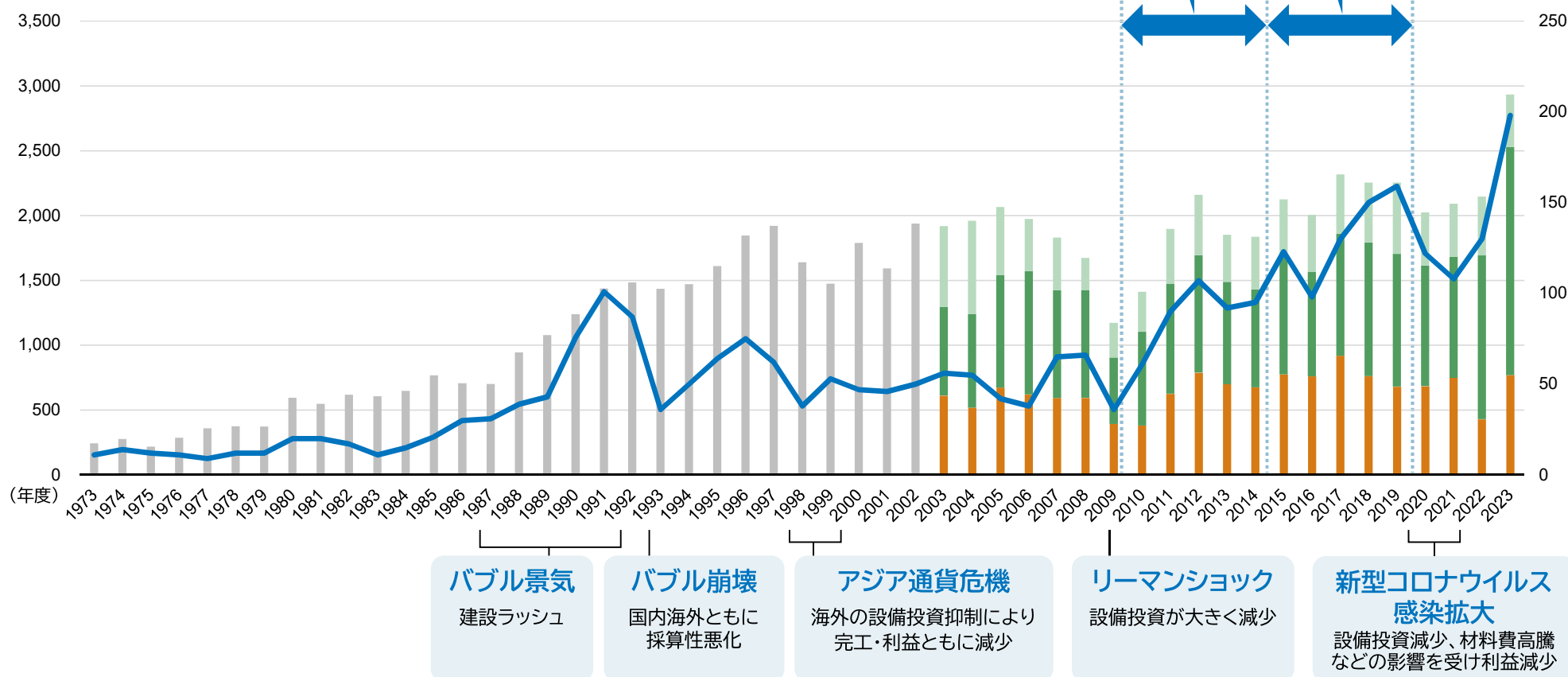
消防設備



市場環境の影響を一定程度受けるものの、 当社の技術力を武器に設備投資の拡大の波に乗り、利益水準は上昇を継続

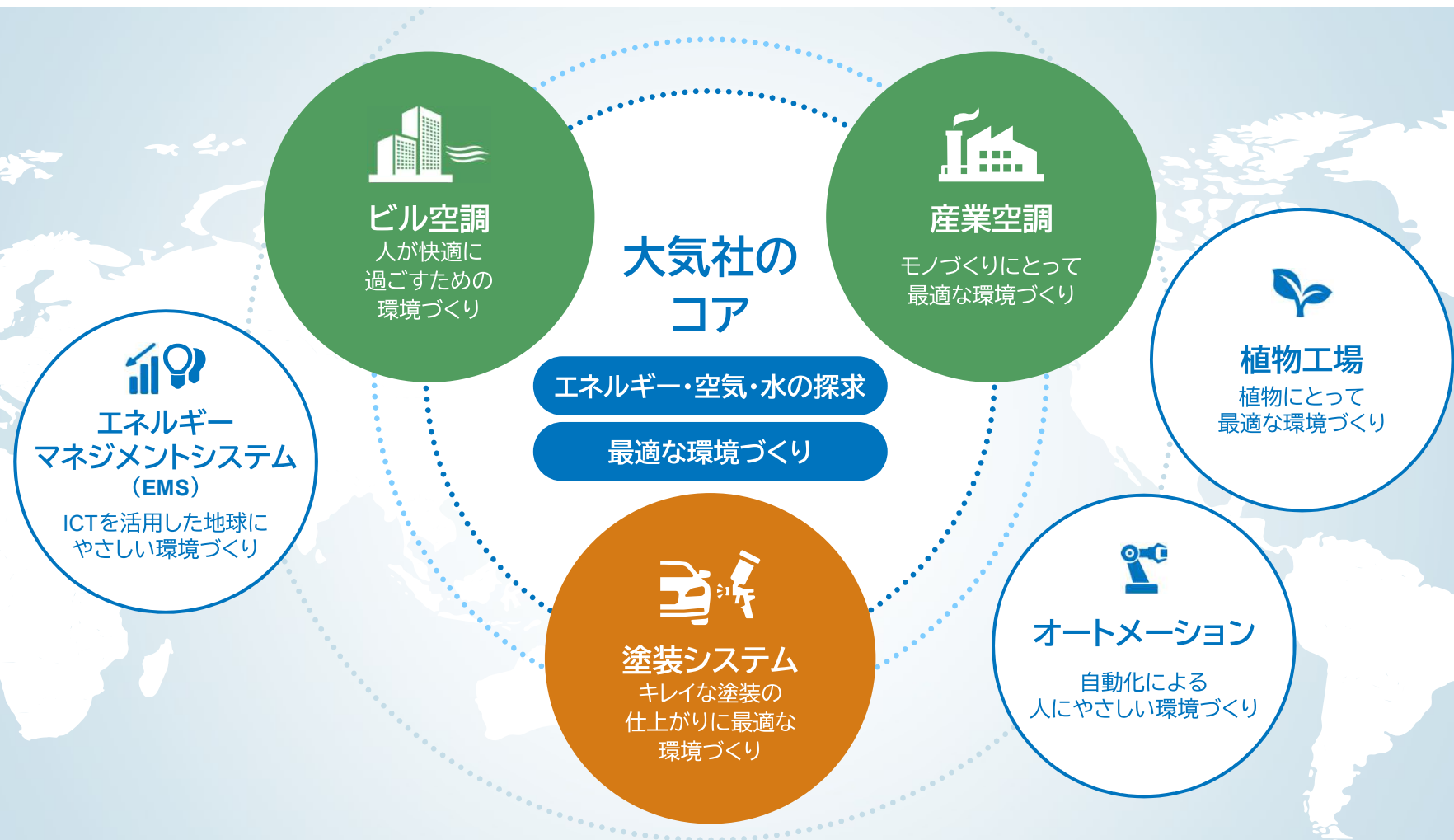
完成工事高と経常利益の推移

(億円) ■ 完成工事高※ ■ ビル空調 ■ 産業空調 ■ 塗装システム — 経常利益※



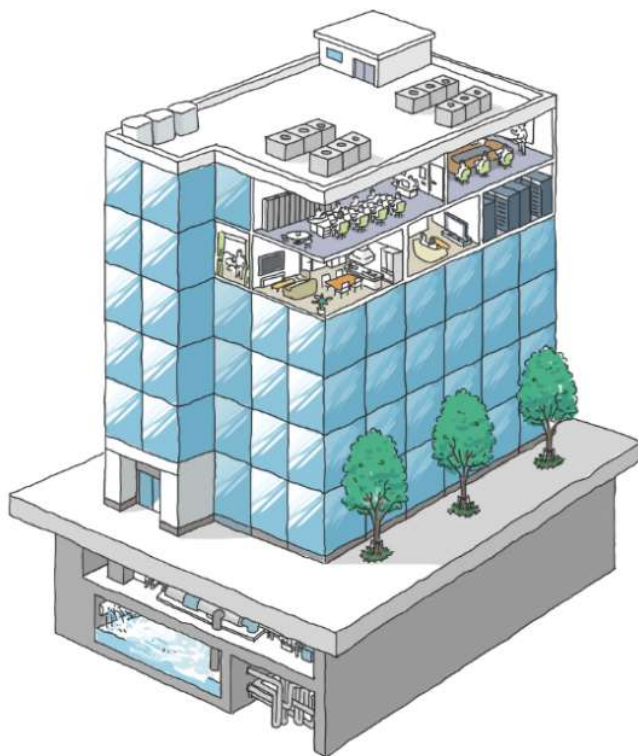
※ 1974年3月期～1993年3月期は単体完成工事高・経常利益、1994年3月期～2003年3月期はセグメント区分前の連結完成工事高

創業以来112年にわたり培ってきた技術と グローバルネットワークを生かし、フィールドを拡大





ビル空調設備では、 人が快適に過ごすための空調設備の設計、施工を実施



対象

オフィスビル、学校、
病院、データセンター、
ホテル、美術館、空港
ターミナルなど、さまざ
まな施設

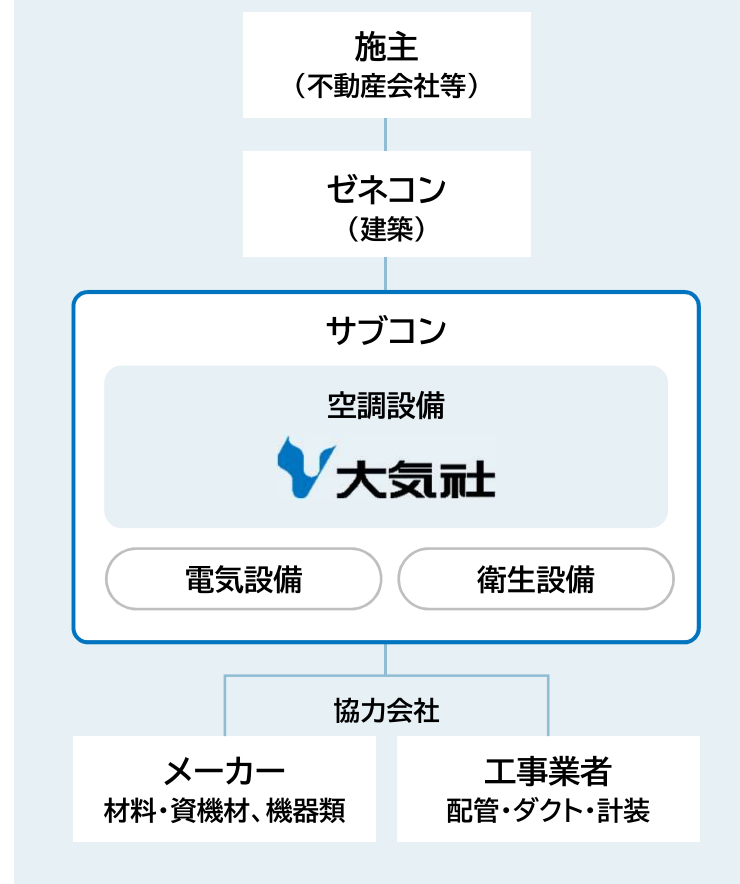
競合他社

空調設備会社や一部の
電気設備会社

今後の見通し

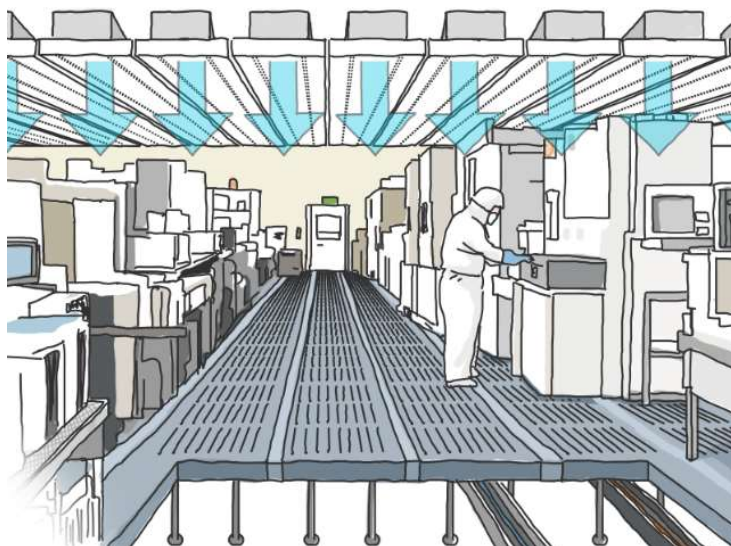
都心の再開発計画など、
建設需要は底堅く推移

■ 業界における立ち位置 新築オフィスビル建設の場合（一例）





クリーンルームなど“モノづくり”にとって最適な空調設備の設計、施工を実施。 電気・電子部品、医薬品分野に注力



対象

- 電気・電子部品、医薬品など、製造過程で高い清浄環境が求められる生産工場や研究施設の空調設備
- 生産装置に必要なユーティリティ設備(冷却水・圧縮空気・排気等)、排気処理装置などの環境保護装置

競合他社

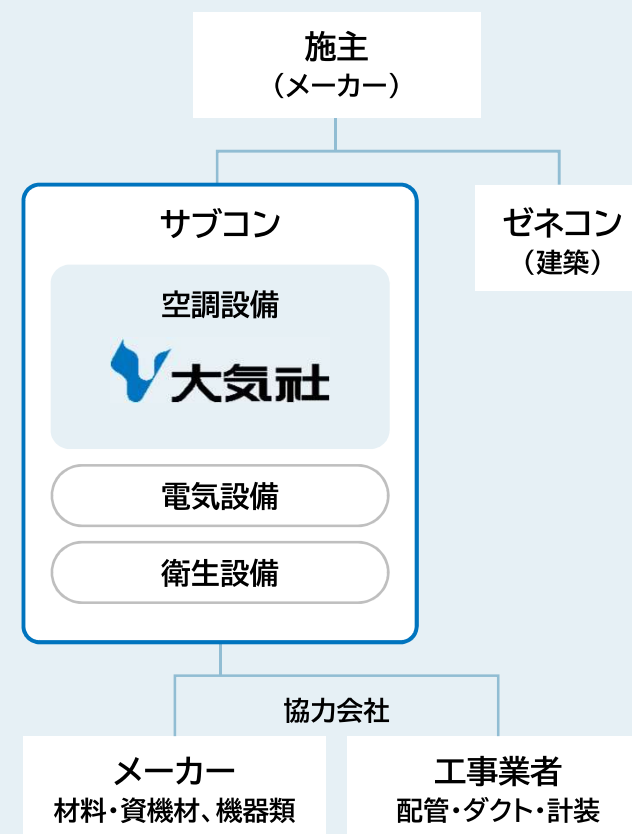
空調設備会社

今後の見通し

半導体関連メーカーや医薬品メーカーにおいて、引き続き**積極的な設備投資の見込み**

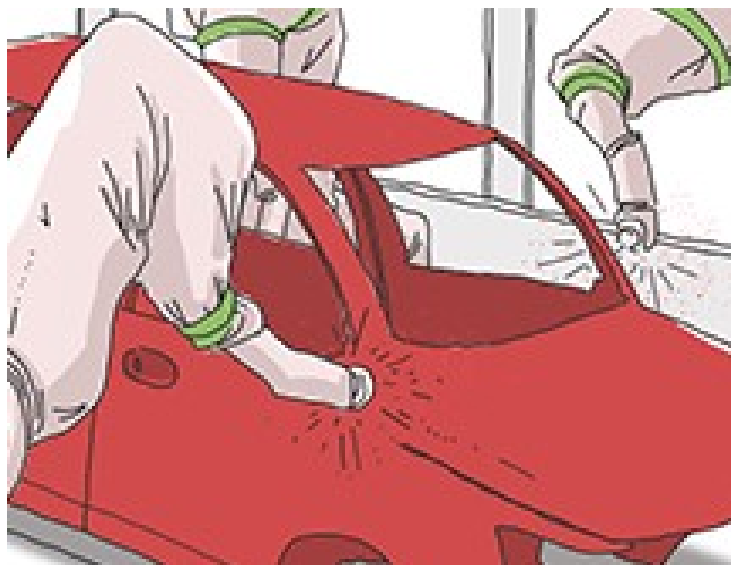
業界における立ち位置

電気・電子部品メーカーの新工場建設の場合(一例)





塗装システムでは、 自動車メーカーをはじめ様々な**塗装工場**の設計、施工を実施



実績

省エネルギーや環境対応に関する高い技術を有する当社は、売上高において**世界第2位**を誇る

競合他社

- ・ 独大手エンジニアリング会社
- ・ その他ローカル企業など

今後の見通し

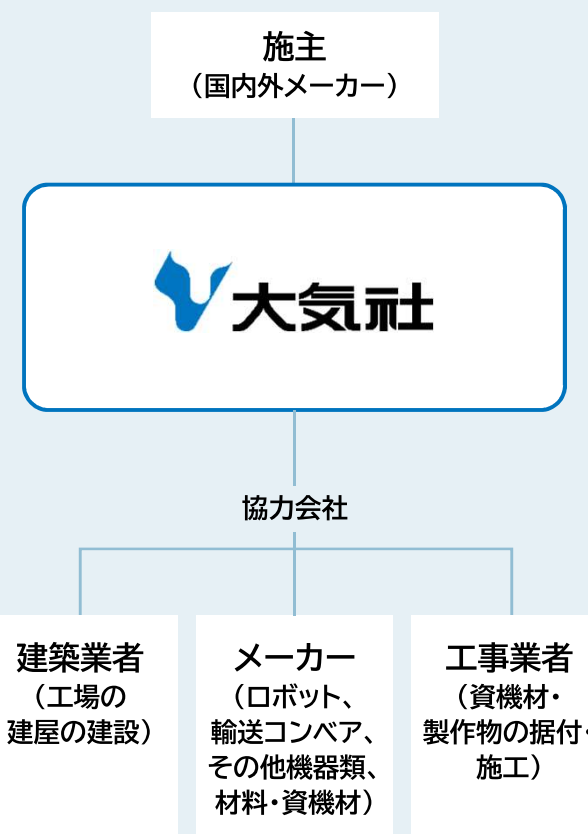
自動車メーカーにおいて、北米・日本などで**設備更新投資**、中国・インドなどで**増産投資**の見込み

■ なぜ塗装？

美しい塗装の仕上がりには、ブース内の空気に、ほこりや塵が無い**クリーンな状態**であることが必要不可欠なため、当社の**産業空調の技術**が生かされている

■ 業界における立ち位置

自動車メーカーの新塗装工場建設の場合(一例)

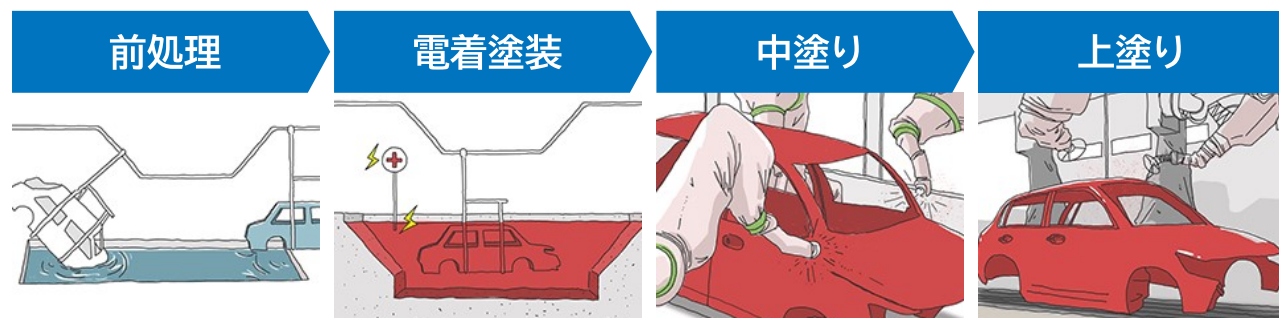


塗装工場の建設について、自動車生産工場からの一括受注が可能のため トータルエンジニアリング会社としての優位性を持つことが可能

自動車生産工場の全体像



塗装工程



塗装ブースに設置する機器・装置類



高度な技術力を要する産業空調分野・塗装システム分野は 参入障壁が高く、模倣・追従が困難

顧客ニーズ

産業空調分野

電気・電子部品メーカー

ハイレベルな清浄度や、
超精密な温度制御など、
最先端の製造環境が必要

医薬品メーカー

プロセスごとに存在する多
数の製造室への対応や高
度な室圧制御技術が必要

塗装システム分野

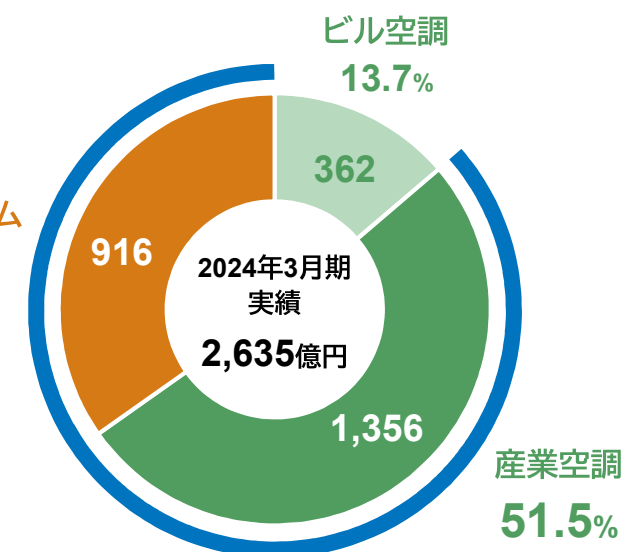
自動車の生産性を考慮したトータルエンジニアリングや、
メーカーのCO₂削減ニーズに応える環境対応技術が必要

受注工事高内訳

(億円)

塗装システム

34.8%



高度な技術が求められる同分野の顧客ニーズに応え続け、
高い受注比率を維持

大気社が参画した、TSMC初の日本工場建設プロジェクトが完成 クリーンルームなどの主要設備工事を担当



今回の経験を活かし、成長を続ける半導体市場において
国内外のお客様に対する存在感を高める

現地に拠点を有することによる充実した顧客サポート体制と 現地化の推進によるコスト競争力が強み

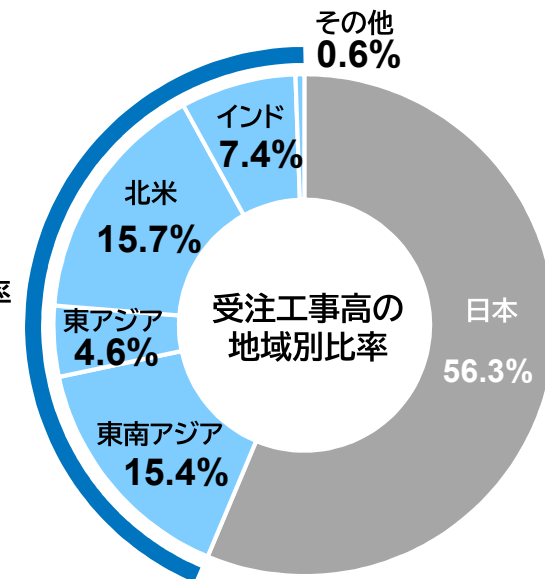
19カ国に 28の海外連結子会社



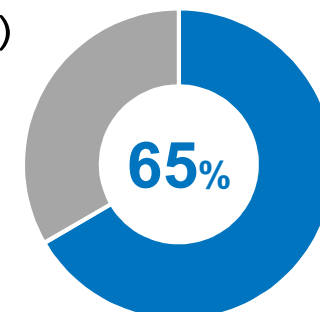
(2024年9月末現在)

■ 受注工事高の海外比率・地域別比率

2024年3月期
海外受注高比率
43.7%



■ 連結従業員数に占めるナショナルスタッフ比率 (2024年9月末現在)



1974年の東証上場以降、経常赤字に陥ることはなく、 市場環境の変化に対する高い柔軟性がある

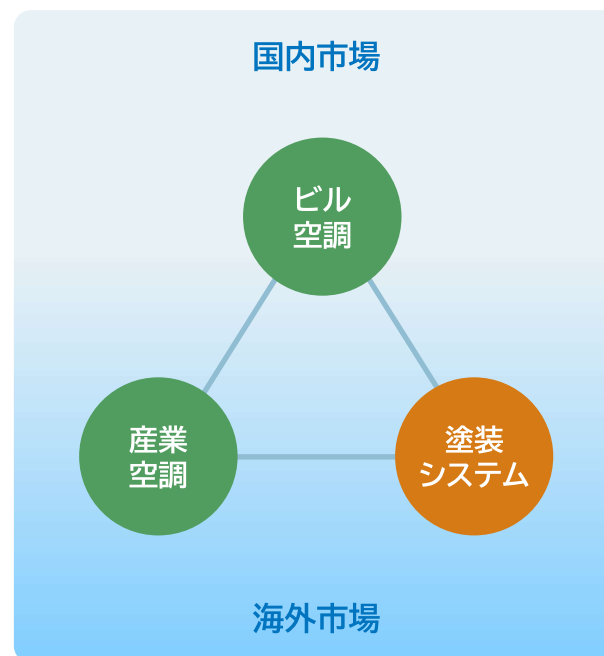
少ない固定費負担

受注や売上が景気の影響を受けやすい事業である反面、設備投資を必要とせず、減価償却費などの固定費負担が少ない



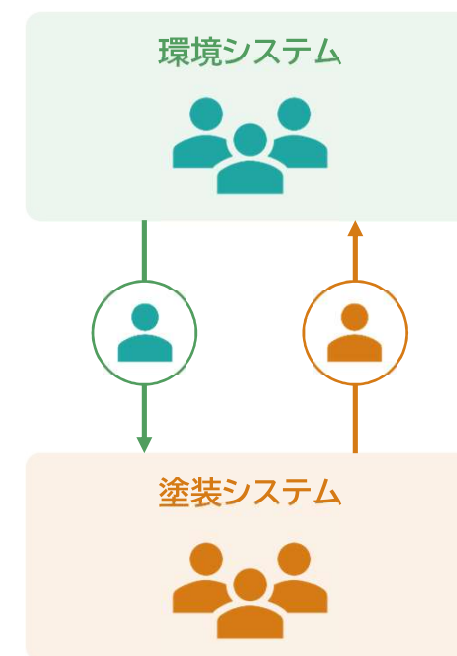
各事業でのリスク分散

市場が異なる3つの事業分野を持っており、国内外の幅広い国に展開。好調な市場分野での補填も可能



人員のフレキシブルな異動

事業分野間でベースとなる技術は共通性が高いことから、需要の変化に合わせて人員体制のフレキシブルな組み替えが可能



環境システム事業

産業空調で培った空調技術を生かし、植物工場事業を推進



概要

LEDを使用し、土を使わず培養液による水耕栽培を行うシステム。栽培エリア内の温度ムラを解消することで、均一な品質の野菜栽培を実現。また、当社の技術を活用し、大株野菜、低生菌野菜の量産が可能。

事業内容

- ・ 事業計画からアフターメンテナンスまで技術を提供する設備の納入
- ・ 生産した品種の直接販売（安定生産が可能）

事業展開

2021年にプラント建設から、野菜の生産・販売まで一貫したソリューションを提供する100%出資の子会社「株式会社ベジ・ファクトリー」を設立



今後の見通し

外食産業やコンビニ向けなど業務用ニーズで需要拡大

ニーズのポイント

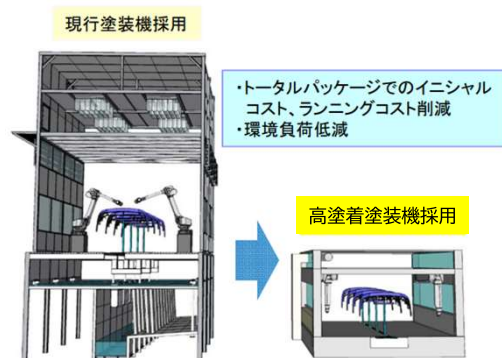
- ・ 収穫量と価格の安定
- ・ 無農薬栽培による食の安全・安心
- ・ 低生菌野菜による消費期限の延長

生産可能な品種

- ・ 結球レタス
- ・ サンチュ
- ・ ロメインレタス
- ・ サニーレタス
- ・ フリルレタス
- ・ サラダ用水菜
- ・ グリーンリーフ など

塗装システム事業

■ 高塗着塗装機採用によるブース小型化・給排気最小化



空気中の塗料散布を抑えた
高塗着効率(90%以上)自動塗装システムを開発

塗料を捕集する装置をミニマム化し、
設備の小型化・省エネルギー化を実現

■ ウェット塗装からドライ加飾への生産技術革新



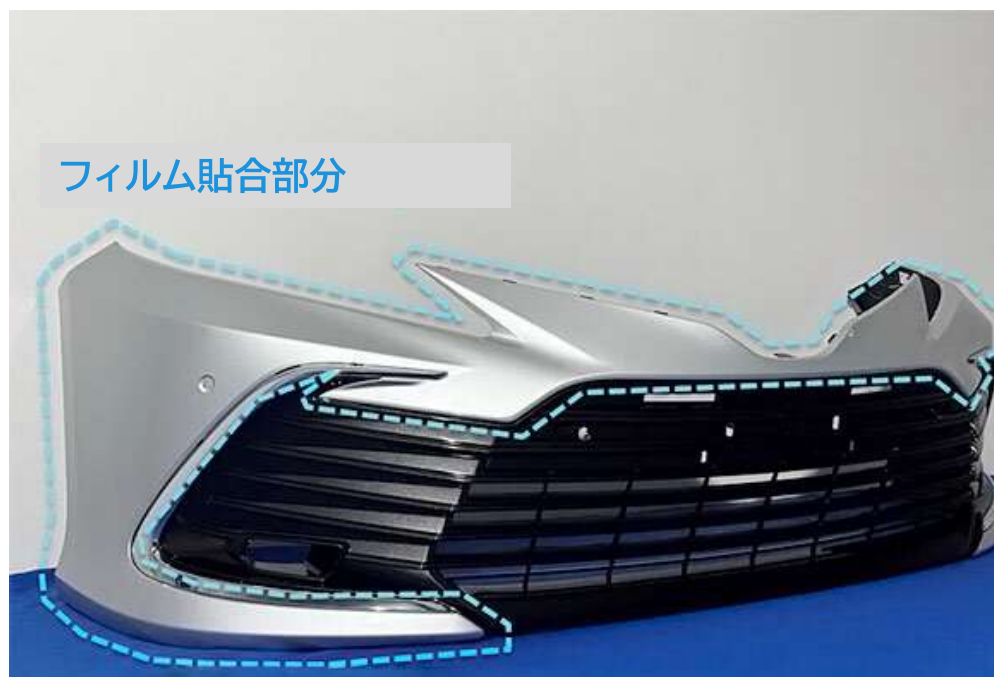
車体ボディにフィルムを貼るなど、従来のスプレー塗装
(ウェット塗装)に代わる塗装代替(ドライ加飾)を開発中

膨大なエネルギーを使用するスプレー塗装の工程が
無くなることで、大幅なCO₂削減を実現

様々な技術を通じてカーボンニュートラル達成を目指す
同時に様々な事業分野に応用・進出を検討中

塗装システム事業

カーボンニュートラル達成のため、「塗装代替」として
全く新しい技術である**ドライ加飾**技術を開発



ドライ加飾ラインの工程イメージ

ドライ加飾に関するPVを
作成しております。
是非ご視聴ください。

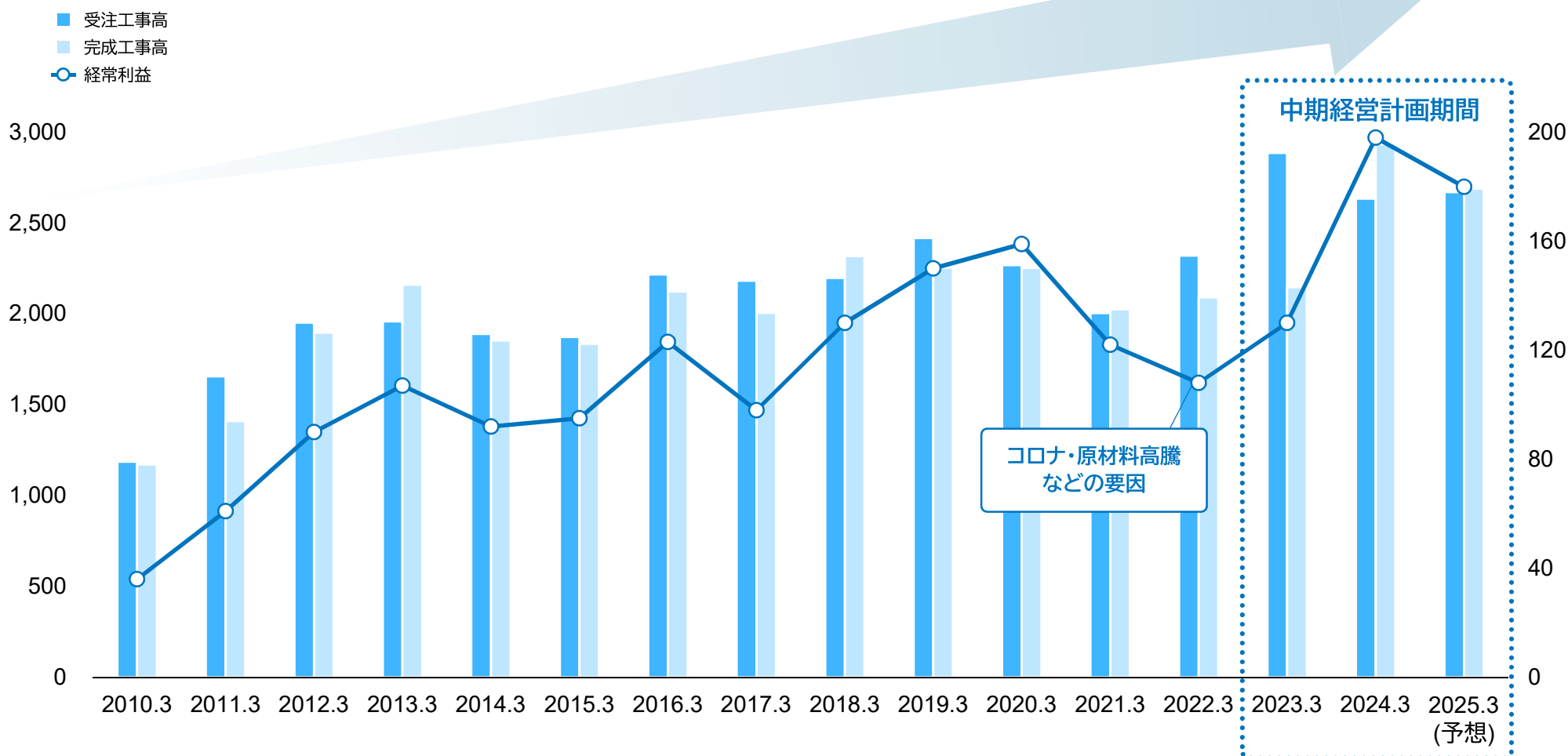


自動車メーカーから、多くの関心が寄せられ、現在急ピッチで開発中
2024年11月デモライン完成

外部環境の影響を受けつつも、右肩上がりの成長を継続

■ 受注工事高・完成工事高・経常利益 推移

(億円)



大型案件剥落により減収減益 受注工事高は増加

市場環境(国内)

半導体関連や自動車メーカーによる投資が継続しており、都市圏における再開発の需要も堅調に推移した。

市場環境(海外)

世界経済の減速懸念はあるものの、各メーカーによる設備投資は堅調に推移した。

受注工事高

2,091億円

〔前年同期比 **+12.8%**〕

完成工事高

1,847億円

〔前年同期比 **-10.0%**〕

経常利益

114億円

〔前年同期比 **-14.1%**〕

親会社株主に帰属する 四半期純利益

81億円

〔前年同期比 **-20.0%**〕

受注工事高は前期比同水準を維持 完成工事高・利益項目においては減少するものの期初予想を上回る見通し

■ 通期業績予想

(億円)	2024年3月期 実績					2025年3月期 予想				
	上期	3Q	4Q	下期	通期	上期実績	3Q実績	4Q	下期※ ¹	通期※ ¹
受注工事高	1,271	581	781	1,363	2,635	1,281	809	578	1,388	2,670
完成工事高	1,304	748	882	1,631	2,935	1,146	701	842	1,543	2,690
営業利益	74	46	61	108	182	62	36	57	94	157
経常利益	81	51	65	117	198	70	43	65	109	180
親会社株主に帰属 する当期純利益	66	35	53	89	156	56	25	41	66	123
ROE					11.6%					8.4%

※ 第3四半期決算時に修正

■ 主要拠点の為替レート

(円)	2024年3月期 実績	① 2025年3月期 新想定	② 2025年3月期 期初想定
USドル	140.55	151.47	147.00
タイバーツ	4.04	4.31	4.03
人民元	19.81	21.04	20.00
インドルピー	1.75	1.83	1.76

■ 為替変動による影響額

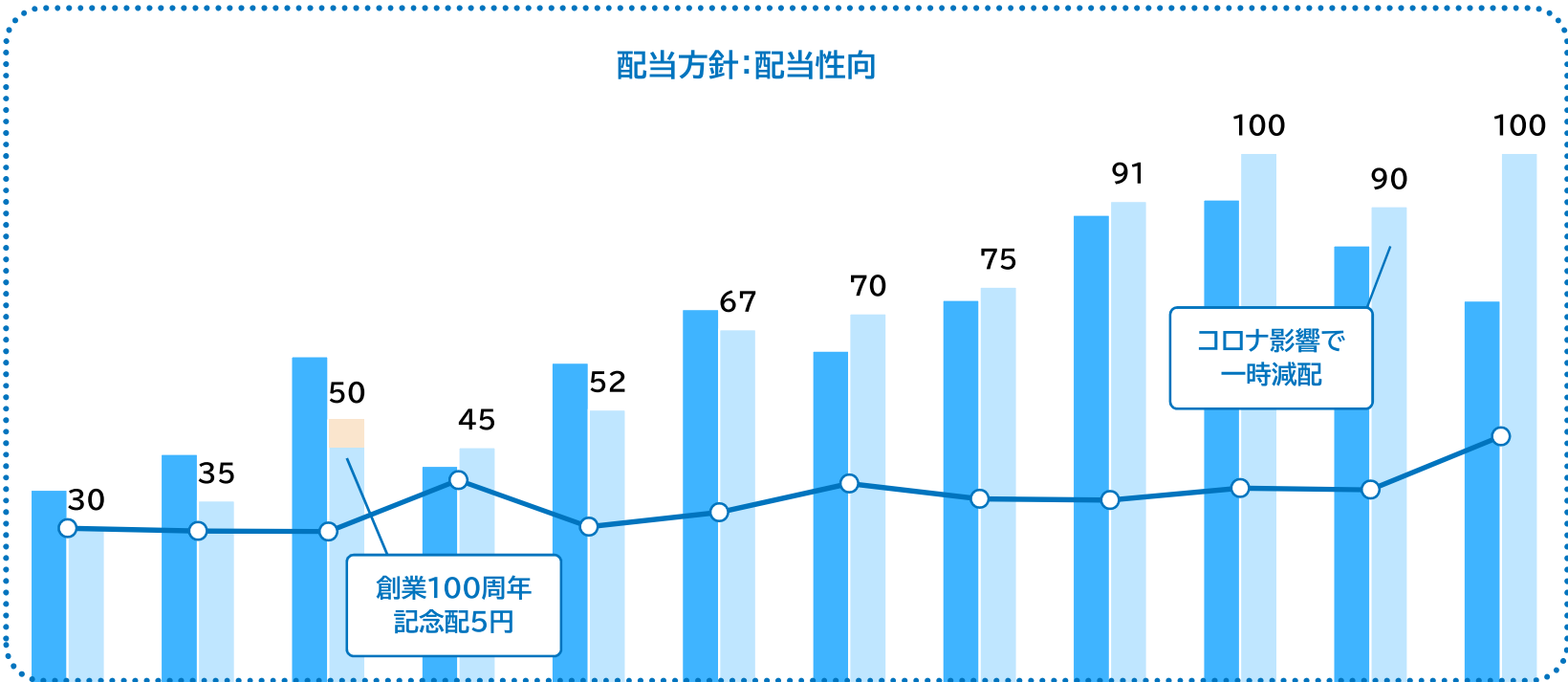
2025年3月期業績予想において、全為替レートが
1%変動した場合の影響額
完成工事高:13億円/経常利益:0.7億円

①と②の為替差による影響
完成工事高:48億円、経常利益:2.9億円

配当性向を基準に増配基調を継続

配当・配当性向 推移

- 当期純利益(億円)
- 年間配当(円)
- 配当性向



	2011.3	2012.3	2013.3	2014.3	2015.3	2016.3	2017.3	2018.3	2019.3	2020.3	2021.3	2022.3
■ 当期純利益(億円)	37.0	43.7	62.0	41.5	60.8	70.8	63.0	72.5	88.4	91.3	82.7	72.4
■ 年間配当(円)	30	35	50	45	52	67	70	75	91	100	90	100
○ 配当性向(%)	29.8	29.3	29.2	38.8	30.1	32.8	38.2	35.3	35.1	37.3	37.0	47.0

連結自己資本配当率 (DOE) 3.2%を目指し、安定的な配当を実施

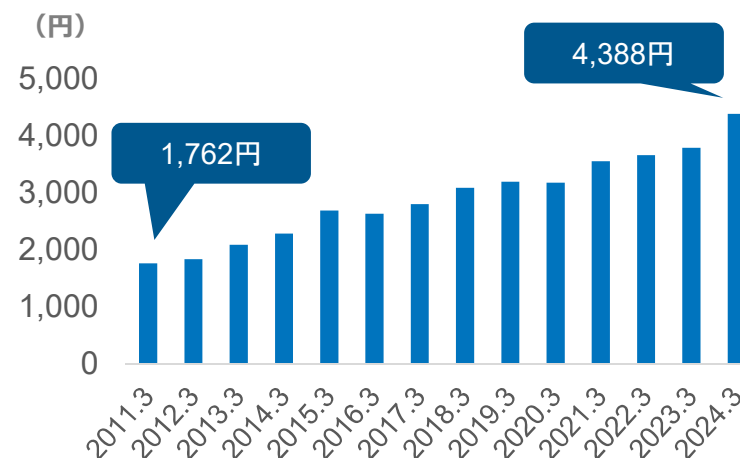
■ DOE基準による配当とは？

配当額＝連結自己資本(期中平均)× DOE(3.2%)

当社の事業特性とDOEの親和性

- ◆ 自己資本が厚い(2024年3月期自己資本比率54.0%)
- ◆ 上場以来経常赤字が無く、直近の利益成長(P17:業績推移参照)も見込まれており、自己資本の積み上がり期待(配当は右図の自己資本が原資となる)
- ◆ 市場環境の変化を一定程度受けるため、利益に連動した配当性向よりも、配当の安定性が増す

1株当たり純資産(自己資本)の推移

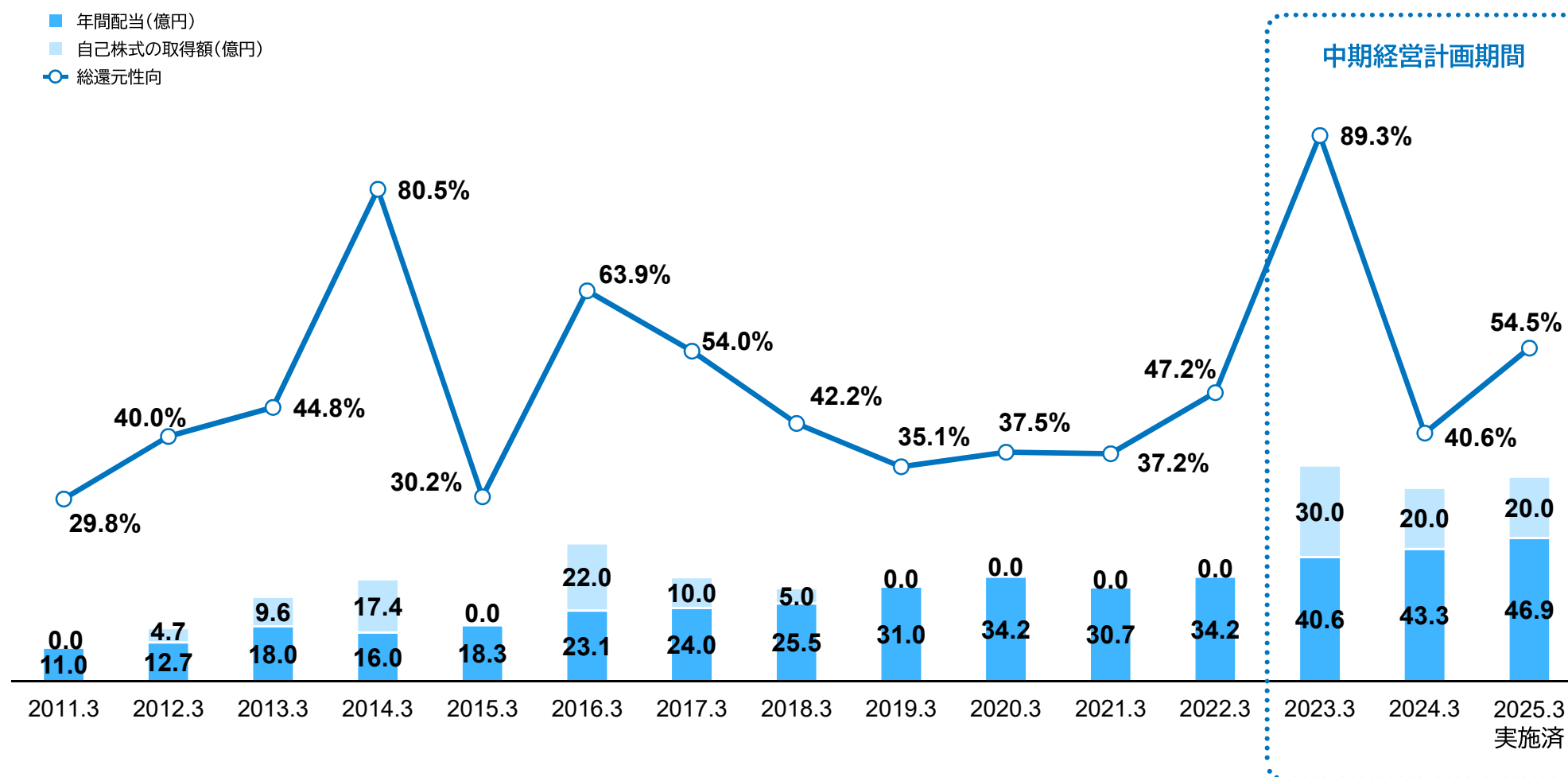


中期経営計画期間(2023年3月期から2025年3月期の3か年)は、1年目の年間配当金121円よりスタートし、2年目131円、3年目の今期144円と増配を予定

配当と自己株式取得を合わせて、高い水準を維持

【自己株式取得の方針】 資本効率の向上と機動的な財務政策の実現を目的として、自己株式の取得を年間20億円を目途に実施(2025年3月期20億円実施済)

株主還元額・総還元性向 推移



※ 自己株式の取得額には、単元未満株式の買取りによる取得を含む

業績に連動し株価も成長。

2010年以降は設備投資の拡大を取り込み、TOPIXに対してアウトパフォーム
2025年3月31日を基準日に普通株式1株を2株に株式分割を実施



株価

2025.3.31迄
4,510円
(3/10終値)



2025.4.1以降
2,255円
(3/10終値)

発行済株式総数

2025.3.31迄
33,582,009株



2025.4.1以降
67,164,018株

※ 2025年3月10日現在

事業の安定性・成長性

- ✓ 歴史ある会社、安定した成長を継続
- ✓ リスク分散が効いており、上場以来、経常赤字無し
- ✓ 自己資本比率54.0%健全な財務体質

株主還元

- ✓ 自己資本の一定比率を配当する仕組みであるDOE基準による、高水準かつ安定的な配当
- ✓ 自己株式取得で株価の上昇期待

創業から事業内容拡大やグローバル展開を進め、 今期で**112年目**を迎える

1913年
(大正2年)

「合資会社建材社」創業
暖房設備、エレベータ、建築材料
等のドイツからの輸入、およびそ
の据付を主な業務とする。

1918年
(大正7年)

建築設備事業を
本格的に開始

高度な設計・施工能力
を持つ暖房設備会社と
して認められるように
なる。(ビル空調分野進
出の契機)

1934年頃
(昭和9年)

「繊維の時代」を
支える

紡績工場の空調への取
り組みを強化し、業績
を急拡大させた。
(産業空調分野進出の
契機)

1953年
(昭和28年)

自動車の
塗装設備事業に
進出

日産自動車の塗装室を
受注。
(塗装システム分野進
出の契機)

1971年
(昭和46年)

タイに初めて海外
子会社を設立

タイの拠点を皮切りに
世界各地に拠点を設
立。

1973年
(昭和48年)

創立60周年を機
に、
社名を『株式会社
大気社』に変更

大気に働きかけ、きれい
な空気を取り戻そうとい
う企業姿勢を表す。

2024年(令和6年)

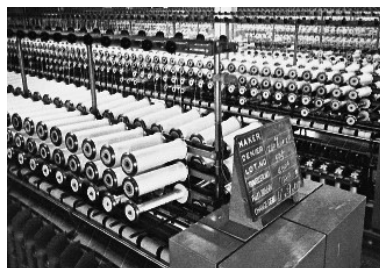
現在は、3つの事業分野を柱に据え、
今期で創立112年目を迎えた



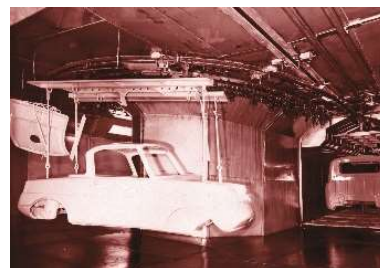
本社前での記念撮影



東京海上ビル



東洋ナイロン社工場(韓国)



東洋工業(現・マツダ)F工場



社名変更の際の新聞広告

環境システム事業、塗装システム事業ともに増加

(億円)	2024年3月期 3Q累計実績	2025年3月期 3Q累計実績	前年同期比 増減
受注工事高合計	1,853	2,091	237
うち国内	1,060	1,065	4
うち海外	793	1,026	233
環境システム事業	1,166	1,320	154
ビル空調	240	389	149
産業空調	926	931	4
塗装システム事業	686	770	83

環境システム事業は減少、塗装システム事業は増加

(億円)	2024年3月期 3Q累計実績	2025年3月期 3Q累計実績	前年同期比 増減
完成工事高合計	2,052	1,847	-205
うち国内	1,229	976	-252
うち海外	823	870	47
環境システム事業	1,589	1,143	-446
ビル空調	312	252	-59
産業空調	1,277	890	-386
塗装システム事業	463	703	240
経常利益合計	132	114	-18
経常利益率	6.5%	6.2%	-0.3pt
環境システム事業	120	87	-32
経常利益率	7.6%	7.7%	0.1pt
塗装システム事業	8	15	6
経常利益率	1.8%	2.2%	0.3pt

中期経営計画で掲げたGHG排出削減目標を再設定し、SBT※1認証取得を申請
サプライチェーン全体での排出削減を推進

※1 SBT: Science Based Targetsの略。「パリ協定」が求める水準と整合したGHG排出削減目標

非財務目標

事業活動に伴うCO₂排出量(スコープ1-3) ⇒

スコープ1・2: 2030年までに42%削減(2022年度比)
スコープ3: 2030年までに25%削減(2022年度比)

TCFD提言に基づく気候関連情報の開示 TCFD

ガバナンス

業務執行取締役の報酬体系について非財務指標を一定割合導入し、気候変動に対する活動の強化を後押しする方向で見直し

戦略／リスク管理

- 2035年において当社への影響度が高いリスクと機会を洗い出し
- リスクマネジメント委員会を設置し、気候変動を含む重大なリスクの低減と顕在化するリスクの最小化に努める

重要なリスク・機会	想定される対応策
炭素税	- GHG削減目標の設定 - 低炭素技術・システム開発 - 再生可能エネルギー業界への参入
顧客行動の変化 省エネ・再エネ技術の普及	- エネルギー循環システムの構築 - 塗装技術の改善・習得・商品開発推進 - CO₂回収・循環技術等の開発
平均気温の上昇	- 植物工場事業の多角展開 - 施工における機械化・自動化の推進 - 労働環境の整備・熱中症対策の推進

指標と目標

CO₂排出量について事業ごとに2050年・2030年の目標を設定

	環境システム事業	塗装システム事業
2050年削減目標※3	CO ₂ 排出量80%削減※2 (2013年度比)	将来のエネルギー変革を加味した技術で、自動車1台あたりCO ₂ 排出量を実質ゼロ化
2030年マイルストーン※3	CO ₂ 排出量25%削減※2 (2013年度比)	現状の塗装工程の熱源構成のまま、自動車のCO ₂ 排出量を60kg-CO ₂ /台まで削減
2022年度取り組み(実績)	建築物のライフサイクルを通じて、使用エネルギーを抑制するシステムを提案し、優れた「低炭素化」「環境負荷低減」技術を提供	塗装ラインのエネルギー試算モデルを活用し、設備の高効率化・小型化を図り、再生可能エネルギーや低温排熱改修システム等を導入

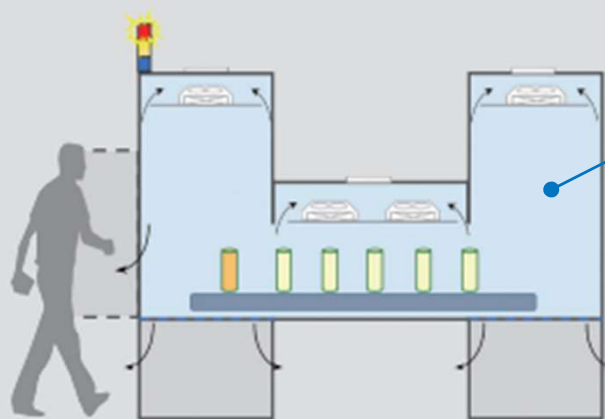
※2 当社の設計施工による設備の運用段階における削減目標
※3 SBT目標に合わせて削減目標の見直し中

環境システム事業

空調設備のミニエンバイロメント化により、工場の省エネ化を進める

■ リチウムイオン電池製造における例

リチウムイオン電池組立工程(イメージ)



必要最小限のエリアのみ
を超低湿度化

自動車のEVシフトで期待
が高まる「全固体電池」の
製造にも応用

■ ミニエンバイロメント化とは？

半導体など精密機器の製造工程で
使用されるクリーンルームは、高いレ
ベルの清浄環境と温湿度管理が要求さ
れ、消費エネルギーが大きい。当社で
は工場全体を制御するのではなく、
必要な部分を局所的にクリーン化・
環境制御する方法を通じて、工場の
省エネ化を図っている。

その他、ICTを活用したエネルギーマネジメント技術やCO₂を排出しない
設備など多岐に渡る顧客の課題解決を通じ、脱炭素化を目指す

塗装システム事業

塗装および研磨の自動化システムなど、自動車塗装で培った技術・ノウハウをもとに、**自動車以外の分野の領域拡大**を目指す。



航空機塗装



建設機械のフレーム塗装

市場の現状

航空機・鉄道車両はともに、数年毎に塗装を剥がし整備後再塗装する必要があるが、現在は**手作業が主流**

今後の見通し

技術者減少や労働安全衛生の観点からニーズがあると同時に、**航空機や鉄道車両の数自体も増加の見込み**

その他の分野

建材市場、一般工業製品など塗装・研磨が必要な分野は多岐に渡り、事業領域を拡大

実績の一例

- 自動販売機の塗装
- 大理石の研磨
- 鏡面加工

など

将来の見通しに関するご注意事項

本資料にて開示されているデータや将来予測は、本資料の発表日現在の判断や入手可能な情報に基づくもので、種々の要因により変化することがあり、これらの目標や予想の達成、および将来の業績を保証するものではありません。またこれらの情報が、今後予告なしに変更されることがあります。

従いまして、本情報および資料のご利用は、他の方法により入手された情報とも照合・確認し、ご利用者の判断によって行ってくださいますようお願いいたします。

本資料ご利用の結果、生じたいかなる損害についても、当社は一切責任を負いません。

本資料に関するお問合せ先

株式会社大気社 経営企画本部 経営企画部 IR課

TEL:03-5338-5052 FAX:03-5338-5195

